
カナタの幻想外伝 「バレンタインデー」

霜月龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナタの幻想外伝 「バレンタインデー」

【Nコード】

N1591G

【作者名】

霜月龍牙

【あらすじ】

今日はバレンタインデー。某巨大電波塔のすぐそばのS高校で彼方たち『カナタの幻想』のキャラが本編とはまた違った物語を織り成す 《注意!》この作品はあくまでフィクションです。あらゆる現実世界の事象や『カナタの幻想』本編には《全く関係がありません》のでご注意ください。では、それを踏まえた上でどうぞお読みください。

ここは某巨大な電波塔の近くにあるS高校である。

S高校は共学の学校であり、120年以上の歴史がある由緒正しい(?)学校である

S高校の隣には中高一貫の有名な私立の進学校があり、これまた100年以上の歴史がある学校である。

その学校は敷地面積でいえばS高校の二倍もあり、さらには著名人を多数輩出しているという凄まじい学校である。

S高校とは、まさにいろいろな意味で天地ほどの差がある学校であった。

さて、突然だが今日は2月14日である。

俗に言うバレンタインデーだ。

特に思春期真っ只中の高校生は数日前からこのビッグイベントをそわそわしながら待っているものである。

そのS高校への通学路をケータイの画面を見ながら歩いているの少年は、山城 彼方だ。

彼はS高校に通う二年生であり、吹奏楽部に所属していてトランペットを吹いている。

その彼は最近ネット小説にハマっており、中でも『艦魂小説』というジャンルがお気に入りである。

いま、彼方は『カナタの幻想』という小説のページを開いて小説の更新をチェックしている。

この小説には自分と同性同名の主人公が出ていて、さらに自分の好きな艦魂小説ということもあり、毎日更新をチェックしている。

「はあ、今日も更新してないや。霜月はいつになったら更新するの

かなあ。」

彼方はそう呟いてため息をはく。

ちなみに、霜月とは『カナタの幻想』の作者であり、つまりこの文を書いている私である
悪かったな更新遅くて。

さて、彼方は普段より大分遅い時間に来ている。

なぜなら、今日は吹奏楽部の朝練が中止になったからである。

それでも始業時刻より30分前に来ているので、かなり早いといえよう。

彼方が学校の近くに来ると、音楽室の方から美しいホルンの音色が聞こえてきた。

その音色で誰が吹いているか分かった彼方は、学校に着くとすぐに音楽室に足を向ける。

音楽室のドアを開けると、そこには一人の少女が一生懸命ホルンを練習している姿があった。

「やあ、錦鶴。今日も朝練かい？」

「はっ、はい！」

錦鶴と呼ばれた少女は慌てて彼方の方に振り向いた。

彼女は彼方より一学年下の高校一年生で、ホルンパートの期待の星だ。

「ん？その包みは何だい？」

彼方はテーブルの上にある包みを指さす。
テーブルの上のそれには、丁寧に包装がしてあってきれいなリボンで留められている。

「なっ、何でもありません！」

錦鶴は慌てた様子で包みを後ろに隠した。

彼方はその包みの中身が非常に気になったが、錦鶴が必死の形相で聞かないで、と訴えるので聞くのをやめることにした。

「うん、ならいいや。それじゃあ僕は教室に行くよ。」

彼方はドアを開けて出ていこうとすると、制服のすそを錦鶴に掴まれた。

「ん？どうしたんだい？」

錦鶴は彼方の声に応えず、俯いたままじっと黙っている。

「えっと あのだ、僕もうそろそろ行かなきゃいけないんだけど。」

「

「あの これを受け取って下さいっ！」

彼方がどうしようかと困っていると、錦鶴がいきなり先ほどの包みを差し出した。

「これを僕に？」

「はっ、はい」

錦鶴は上目遣いに彼方を見つめる。
その瞳には不安であふれていた。

「うん、ありがたく頂くよ。」

「あつ、ありがとうございます」

彼方がそう言って微笑むと、錦鶴も少しだけ微笑んでくれた。

錦鶴と別れた彼方が、自分の教室に入ると、女子生徒が挨拶してきた。

「おはよう、彼方っ！」

「おはよう、幻龍。今日は朝練ないんだね。」

幻龍と呼ばれた少女は、彼方のクラスメートである
彼女は陸上部のエースであり、何度か全国大会で優勝するほどの実
力を持っている。

「うん、今日は天気良くないから中止になったんだ。」

「そうなんだ、よかったじゃないか。」

「うん、でも大会が近いからもっと練習しなきゃいけないんだ
けどね。」

幻龍は複雑そうに笑う。

「へえ、幻龍って結構練習熱心なんだね。」

「えへへ、そうでもないよ。」

幻龍は照れたように頬をかく。

「あつ、そうだ。今日は何かテストとかあったっけ？」

「えーっと、3時間目に漢字の小テストがあつたはずだよ。」

「あつ、そういえばそうだったけ。じゃあ今から勉強しないと。そつえば山城君こそやなくて大丈夫なの？」

「僕は昨日のうちに勉強しておいたから。直前に見るだけで大丈夫だよ。」

「うわ　　さすが山城君だね。」

「

彼方が読もうとしているのは、

「宮本武蔵」である。

彼方は剣豪物や架空戦記の本が大好きで、彼の部屋の本棚にはそれらの本がずらりと並んでいる。

普通ならオタクとして間違はなく敬遠されるが、彼方はその人柄の良さからクラスでも友人が多いのだ（主に女子だが）。

彼方は始業5分前のチャイムで読んでいた本を閉じて授業の準備を始める。

すると、一人の女子生徒が眠そうな顔をして教室に入ってきた。

「やあ瑞鶴、おはよう。」

「おはよ。」

瑞鶴と呼ばれた少女は自分の席に着くと、すぐに眠り始める。

彼女は吹奏楽部でフルートを吹いており、彼方とは幼馴染の関係だ。彼方はそんな瑞鶴を少しの間見つめていたが、一時間目がホームルームだった事を思い出して再び本を読み始める。

読書を再開してしばらくすると、一人の女子生徒が教室に入ってきた。

「おはよう、彼方君。」

「ああ、おはよう翔鶴。」

彼方は本を閉じて翔鶴と呼んだ女子生徒に挨拶する。

翔鶴と彼方は幼馴染であり、バトミントン部に所属している。

ちなみに、瑞鶴とは双子の姉妹であるが、二卵性双生児のために顔はあまり似ていない。

「ねえ、彼方君。今日は何の日か知ってる？」

翔鶴はニコニコしながら彼方に聞いてくる。

今日はやけに機嫌がいいな、と思いつつ彼方は質問に答える。

「えっと、今日は漢字の小テストじゃなかったっけ？
今回は範囲が多いから今のうちに勉強しておいた方がいいよ。」

「あつ、そうなの。ありがとう　じゃなくて！
本当に知らないの？」

彼方は翔鶴に言われて周りを見渡す。

よく見ると、男女共に何やらそわそわしているようだ。

「あつ、分かった！席替えだ！

そういえば三笠先生がいつまでも引き延ばしてたから、三学期の始めにやる予定が今日になったんだっけ。」

三笠先生とは、彼方のクラスの担任で英語を教えている教師である。彼女は元タイギリス人であったが、高校生の時に日本に帰化してそのまま日本の大学に進学し、教員免許を取っている。

年齢は3《ピー》歳であるが、その年齢にそぐわない若々しい美貌から一部の男子に人気の教師である。

ちなみに、彼方もそのフアンの内の一人である。

「そうなのよ。また山城君の隣になればいいな　じゃなくてっ！
今日は何日か分かる？」

「2月14日でしょ？
陸軍の落下傘部隊がパレンバンに奇襲攻撃を行った日に決まってるじゃないか。」

「もう、何それ。また戦争もの？
いい加減子供じゃないんだからそろそろ卒業してよ。」

翔鶴は相変わらずの彼方の趣味に深くため息をつく。

「いいじゃないか、別に僕の趣味なんだから」

「それより！今日は何のイベントがあるか知ってる？」

翔鶴は的外れな答えを繰り返す彼方に呆れながら、それでも根気よく質問する。

「うーん あつ、バレンタインか！どうせ僕には関係ないから忘れてたよ。」

「はあ まったく鈍感なんだから。あれ、この包みは何かしら？」

翔鶴は鞆の中に入っていた包みを手に取る。

「ああ、それか。さっき錦鶴にもらったんだよ。あれ、翔鶴どうしたの？」

「へえ そうなんだ。彼方君は年下が好みなんだ」

翔鶴はそれっきり黙ったまま殺気を放ち始めた。

「えっ、どういう事？」

彼方がそのことを翔鶴に聞こうとすると、教室のドアが開いた。

「おはよーっ！さあ、早く席に着いて！」

担任である三笠先生がそう言いながら教卓に向かう。

翔鶴はライバルの登場にあからさまに顔を歪めながら自分の席に着いた。

「今日は重大発表があります。それは 席替えです！」

教室中から歓声が沸く。

「でも、その前に 山城君たちは例外で、このように座ってもらいます！」

そう言つて先生が取り出した図には、彼方を挟んで両隣に翔鶴と瑞鶴で、その前に幻龍が座る、といった席順である。

（なんでいつも僕だけ例外なんだろう？）

（やった また彼方君と隣だwww）

（ 眠い、うるさい。）

（ちえっ、前だったら彼方君とお話できないじゃない。この三十路女め ）

「ん？幻龍、何か言つた？その席が不満なら彼方君から遠い席に変えてあげるけど？」

わたしの経験からいうと、前の席は授業の間ずっと彼方君に見つめてもらえるからいいと思つただけだなあ

「

三笠が残念そうな顔をして言うが、口元は若干ニヤついている。

「はい、その席がいいです！ぜひともわたしにその席を！」

「はいはい、わかったわ。それじゃあ、みんなは早くクジを引きに来てね！」

「あの　僕の意見は？」

「はいはい、代わりにわたしが作ったチョコをあげるから気にしないで、ね？」

『えゝ、山城ばかりずるいぞ！』

クラス中の男子から野次やブーイングが起こる。だが、そんな彼方はうつとりと三笠を見たままだ。それを見た三人の表情が不機嫌なものに変わるが、三笠は特に気にしていないようであった。

「ほらほらっ、ちゃっちゃとくじ引きに来て！」

こうして波乱の午前が終わり、学生たちが待ちに待った昼食の時間が来た。

ちなみに、彼方は席替えの後に三笠先生にチョコを貰ったのだが、その直後に翔鶴にぶん取られて全部食べられてしまった。

委員長である慧龍の号令が終わると同時に、数人の生徒が購買に向けて猛ダッシュをかける。

目標はみな同じ。

焼きそばパンやカツサンドといった人気の惣菜パンを手に入れるためだ。

ちなみに、この争いに負けるとおせんべいパンや焼き魚パンといったゲテモノを泣く泣く買う羽目になるという、まさに命がけの戦い

であつた。

さて、そのダッシュしている生徒たちの先頭には、陸上部のエースである幻龍の姿があつた。

（わたしは負けないわ！わたしに焼きそばパンとカツサンドを頼んだ山城君のために！）

彼女がこのように燃えている理由は数時間前に遡る。

・
・
・

（はあ やっぱり前の席は駄目じゃない。年増にハメられたわ）

幻龍が今朝の席替えの結果に落ち込んでいると、後ろの席の彼方が話しかけてきた。

「ねえ、幻龍。ちよつといいかな？」

「うんっ、どうしたの山城君？」

幻龍はぱあつと顔を輝かせて後ろを振り向く。

「あのさ もし良かったらでいいんだけど、今日の昼に焼きそばパンを二つ買ってくれないかな？」

「えっ うん、任せてよ！」

「本当かい！？ありがとう。」

・
・
・

（よしっ、あとはこの直線をダッシュするだけだわ！）

幻龍は既に学食まであと僅かという距離まで走っていた。

彼女が後ろを振り返ると、もう後続の生徒たちの姿はない。

彼らは彼女のあまりの速さについていけなくなったのだ。

彼女はそんな状況にほくそ笑むと、学食に向けてさらにスピードを上げたのであった

「あっ、幻龍お帰り。どうだった？」

彼方が教室に入ってきた幻龍に話しかける。

「もちろん！けっこう余裕だったよ！」

そう言っつて幻龍は戦利品を高々と掲げる。

「本当にありがとう。さすが幻龍だね！」

「えへへ。もう、褒めても何も出ないわよ。」

幻龍は彼方に褒められてだらしく笑う。

それを見て翔鶴は幻龍を睨みつけるが、彼女は余裕の笑みでそれかわす。

「さあ、幻龍も一緒にご飯を食べようよ。」

「うんっ！」

彼方に誘われて幻龍は自分の席に座って、彼方の方に机を動かす。すると、彼方は鞆から弁当箱を取り出してそのままその弁当を食べ始めた。

（あれっ、山城君は弁当を忘れたわけじゃないの？）

幻龍が彼方が弁当を持っているのに自分にパンを買ってくるように頼んだことを疑問に思う。

すると、彼方の隣に座っていた瑞鶴が彼方の袖を引っ張った。

「えっ、まだ食べたいの？じゃあこれをあげるよ。」

彼方はそう言って先程幻龍が買ってきたカツサンドを瑞鶴に渡す。

「
ありがとう」

瑞鶴はそのままカツサンドを食べ始める。

結局、瑞鶴は幻龍が彼方にあげた惣菜パンを全て平らげてしまった。

「まったく、その量の弁当に加えてよくカツサンドが食べられるよね。」

啞然としている幻龍の横で、彼方は瑞鶴を苦笑しながら見ている。

「
だっってお腹が空いてるから。」

瑞鶴は平然と答えて、今度は昼寝の体勢に入る。

彼女はその体勢に入ってから十秒も経たない内にすやすやと眠ってしまった。

そして、すぐそばでは幻龍がさめざめと涙を流しており、それを翔鶴が慰めていた。

六時間目が終わり、殆どの生徒が待ち望んでいた放課後がやってきた。

彼方と瑞鶴は部活をするために二人で音楽室に向かった。

そして練習が終わったあと、最後まで音楽室に残っていた二人は、音楽室の鍵を閉めて教室に荷物を取りに行く。

彼方が机の中の教科書を鞆に入れようとしたとき、瑞鶴が急に話しかけてきた。

「彼方、渡したいものがあるんだけど。」

「何だい？」

彼方は教科書を鞆に入れて瑞鶴の方に振り向く。

「あの、今日はバレンタインだから チョコをあげる。」

瑞鶴は恥ずかしそうに言ってチョコが入った包みを差し出す。

「ありがとう あのだ、ちゃんと中身あるよね？」

彼方は一番懸念している事を尋ねる。

食いしん坊である瑞鶴は、人に贈るものであっても、つつまみ食いをしてしまうのだ。

「うん、いちおう。」

「その間はなんだい？」

「だいじょうぶ、ちゃんとチョコは入っている。」

「なら、どうして目を逸らすんだい？」

「ごめんなさい、実は一個だけ食べちゃった。」

瑞鶴はそう言って恥ずかしそうに俯く。

「そうなんだ　まあ去年と比べて進歩したんだね。
いや、あの時半分しかないチョコをもらってびっくりしたよ。」

「いじわる。」

彼方がその時の事を思い出して笑うと、瑞鶴は頬を赤く染めた。

「なによ　山城君ったら瑞鶴ちゃんと楽しそうにしゃべってる
じゃない。」

「ほんとだ　瑞鶴ばかりずるい。」

二人のいる教室のドアの外では、翔鶴と幻龍が彼方たちのやりとりを覗き見していた。

「なあ、貴様らが動かないと私も入れないんだが」

女子生徒は翔鶴と幻龍が教室のドアを通せんぼしているのを見て、困ったように言う。

「あつ、加賀。いいところなんだから邪魔しないでよ。」

その女子生徒　加賀はまたか、といった風に肩をすくめる。

「一体この中で何が起きているんだ？」

「実は」

瑞鶴と幻龍は現在室内で起きていること（彼女らの誤解が多少含まれている）を加賀に説明した。

「そうか　そういえば今日はバレンタインとかいう日だったな。」

「ちなみに加賀は誰かに渡したの？」

「いや。そういう日の存在を今思い出したばかりだ。」

加賀ががっかりしたように言った直後、唐突に教室のドアが開いた。

「あれ、翔鶴に幻龍に　加賀じゃないか。一体どうしたんだい？」

ドアの向こうには、翔鶴たちが目を離していた間に帰る準備を終わらせた彼方と瑞鶴がいた。

「べつ　べつになんでもないよ。ねっ、幻龍？」

「う、うん。ただここで話していただけだよ。ね、加賀？」

「ああ、そうだな。概ねその通りだ。」

「そうなんだ　じゃあ、みんなと一緒に帰らない？」

「そうだな、それはいい案だ。」

加賀がうんうん、と頷く。

「そつ、そうだね。ねえ、山城君。ちょっと手を出してみて。」

「うん、分かった。」

彼方が幻龍に手を差し出すと、その手には小さな包みが置かれた。

「はいっ、チョコあげる。今日はバレンタインだよねっ！」

「ありがとっ、幻龍。後で食べさせてもらっよ。」

幻龍が顔を真っ赤にしてチョコを渡すと、彼方はうれしそう笑った。それを見て、幻龍もまぶしいくらいに微笑む。

そのとなりでは、すっかりチョコを渡す機会を逃してしまった翔鶴が頬を膨らませていた。

「あのっ、彼方君。えつとね　」

「おーい、早く行くぞ。」

翔鶴が彼方にチョコを渡そうとした瞬間、加賀が大声で彼方たちを呼ぶ。

「うん、分かったよ。ほら、翔鶴も行くよ。」

「えっ？」

またもやタイミングを逃して呆然としていた翔鶴は、急に手を引っ張られるのを感じた。

驚いて自分の手を見てみると、彼方がしっかりと自分の手を握っているのが見えた。

（彼方君の手って大きいんだな　　）

翔鶴は彼方が自分の手を放した後も、ずっと自分の手を見ていた。その彼女の頬は夕日に染まって紅く輝いていた。

「ごめんね、いきなりこんなところに呼び出したりして。」

「ううん、別に構わないけど。それにしても、この公園は懐かしいね。」

彼方は周りの遊具を見渡しながら言う。

ここには二人以外は誰もいない。

なぜこのような人気のほとんどない公園に二人がここにいるのかといえば、翔鶴が彼方にここに来るように電話で呼び出したからであった。

この公園は彼方や翔鶴が小さい頃に一緒に遊んでいた公園である。小学校に入ってからほとんど来なくなったが、二人にとっては懐

かしい思い出でいっぱい場所である。

「うん、そうだね あのね、今日は大事な話があってここに呼んだんだ。」

そう言つて、翔鶴は急に真剣な顔になる。

それは、彼女がバドミントンの試合のときに見せる顔よりも真剣であつた。

「ねえ、彼方君。あのね、もしかしたら気付いてるかもしれないけど あのね。」

わたしは 彼方君のことが、ずっと 」

そして、翔鶴の唇がその続きを紡ごうとする。
だが、彼方はその言葉を聞くことはなかった。

「はっ！ ん？夢だったのか。」

彼方は思わず周りを見渡す。

そこは紛れもなく『瑞鶴』の自分の部屋であつた。
先ほどの光景が夢であつたことを確認した彼方は、ベッドから降りてストレッチをして体をほぐす。

「それにしても変な夢だったなあ。
夢に出てきたのは翔鶴とか瑞鶴といった艦魂ばかりだったし、高校とかいうよく分らない所にいたし。」

でも、いつかはあんな平和な日が来てほしいな。」

彼方はそう呟いて窓の外を眺める。
そこには、相変わらず蒼い空と海がどこまでも広がっていた。

彼方はしばらくその風景を見ていた後、防空指揮所に向けて足を運んだのであった

（後書き）

霜月「ども、久々の更新（？）です。本編とはまた違った風に書いてみましたが、いかがでしたでしょうか？」

錦鶴「あの　台詞が多くてとても緊張しました。」

幻龍「本編全てを合わせたより台詞が多くて感動したわ！」

慧龍「そういえばわたしの台詞は一個もなかったですね。」

宝鶴「あんたは名前が出たからいいじゃない。私なんて名前すら出てすらいないわ。」

霜月「いや、今回はあくまでも普段スポットライトが当たらないキヤラを書こうという企画なので。」

翔鶴「そんなのはどうでもいいんです。最後のあれはあんまりじゃないですか？」

霜月「ああ、夢オチのことか。あれは色んな意味でしょうがないですよ。」

翔鶴「しょうがないじゃ済みませんよ！あのまま告白して山城さんとキスをする流れだったのに
！」

霜月「いや、誰もそんなシナリオ書いてないから
」

三笠「まあまあ、落ち着いて。それよりさ、最近外伝の更新が滞っているみたいんだけど。」

霜月「ギクツ！そつ、それは最近少々忙しかったものですから。」

三笠「ふうん、もし今月中に上げなかったら　わかってるよね？」

霜月「はっ、はい！もちろんであります！」

宝鶴「そついえば本編の方はアップしないの？」

霜月「正直言つて、最近これに集中してたから本編は全く進んでないです。」

宝鶴「ふうん。まっ、自分の身が可愛いならさっさと仕上げるからね。」

霜月「肝に命じておきます。」

翔鶴「あつ、これを読んで下さっている方で本編をまだ見ていない方は、もしよければそちらも見てくださいね。」

瑞鶴「　ご意見・感想待ってます。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591g/>

カナタの幻想外伝 「バレンタインデー」

2010年11月5日02時19分発行